

(要約版)

## 南北朝期における喫茶の実態に関する考察

島崎綾子

(武蔵野大学大学院文学研究科日本文学専攻博士後期課程)

### 1. 研究目的

日本における喫茶の研究は様々な視点から行われており、多くの研究成果の蓄積がある。しかし、南北朝期の喫茶についてはこの時期に流行をみた闘茶に関する研究のほか、通史の中で触れられるにとどまっているのが現状である。また、史料の整理もなされておらず、当該期の喫茶に関する史料がどの程度あるのか把握されていない。また、当時流行していた闘茶についても十分に検討されているとはいえず、織豊期や江戸期といった他の時期に比べると明らかにされていることが少ない。この現状を踏まえて、本研究では、当該期の日記・記録類、古文書の喫茶に関係する史料を蒐集し、分析を行うことでその実態を明らかにすることを目的とする。中心とする史料は『師守記』、『看聞日記』、『祇園社家記録』とする。なお、『看聞日記』は当該期よりも少々下るが、『師守記』の喫茶との関連が考えられるので、検討史料に加えることとする。研究がそれ程進んでいない当該期の喫茶に関する考察をおこなうことは、喫茶文化史の研究促進に大いに寄与するという点で意義があるといえる。

### 2. 研究方法

本研究は、史料に基づき当該期の喫茶の実態について明らかにすることを目的としている。そのため、喫茶に関する史料の蒐集が必要となる。『園太暦』、『空華日用工夫略集』、『後愚昧記』といった史料は、まず翻刻された史料集等を入手し、関係史料を抽出・整理し、精査ができる状態にしたのち、分析を行う。さらに、今回調査対象としている史料は、そのほとんどが翻刻されているが、誤植がないとは言い切れない。そのため、可能な限り原史料との照合を正確に行うこととした。

### 3.研究成果・結論

本研究にあたっては、南北朝期の記録である『師守記』、『祇園社家記録』、『園太暦』、『空華日用工夫略集』、『後愚昧記』から喫茶に関する史料を抽出し分析を行った。その結果、『師守記』と『祇園社家記録』がそれぞれ100件以上の茶に関する記事を有していたのに対し、残りの記録にはほぼ記事がなく、特に喫茶に関する記載はないことがわかった。

また、当該期の喫茶は、現状の史料から以下の三種に大別できると考えられる。

- ①闘茶：本非十種、飲茶勝負、十種茶、百種茶、回茶、順事茶会（飲み分け・懸物を含む）など
- ②非闘茶（茶寄合）：巡茶、順事茶会（飲み分け・懸物を含まない）、御茶会、茶事など
- ③もてなしの茶：羞茶など

闘茶は、本非などの茶の飲み分けを行っている場合、懸物を伴う場合とし、遊技的要素を含むことが多いといえる。一方、巡茶や順事茶会といった喫茶形態は、茶の飲み分けも懸物を伴うこともないものであり、茶寄合と表現すべきであると考えられる。そして、闘茶・非闘茶（茶寄合）にかかわらず、ある程度の期間連続して行われるものと、一度で終わるものに分けることもできる。前者は巡茶や順事茶会、百種茶、後者はそれ以外で、もてなしの茶も含む。

さらに、当該期の喫茶の特色として、雲脚の使用があげられる。特定の産地や味などについて具体的に触れた史料は現状見当たらないが、本茶ではない非茶の一種であると考えられる。贈答やもてなしに使用されていることから、高級茶とまではいえないが、少なくとも悪茶ではないといえる。さらに、日本における初見が『師守記』であったことのほか、いくつかの使用例を明らかにできたことも成果のひとつといえよう。